主催 北海道ポーランド文化協会 http://hokkaido-poland.com/

第 114 回例会（どなたもご参加歓迎）

ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会 2025

『イーダ Ida 』 2013｜82 分

ポーランド/デンマーク/フランス/イギリス

第 87 回 (2015) アカデミー賞外国語映画賞
ワルシャワ国際映画祭グランプリなど受賞多数

2025.**3/19**（水）
18：30～　入場無料
札幌エルプラザ４F 中研修室（北 8 西 3）

予約(推奨)お問合せ先 ☎080-4071-0956 (安藤)
✉ hokkaidopolandca@gmail.com

パヴェウ・パヴリコフスキ監督（1957～）
オックスフォード大学で文学と哲学を専攻、のち英国などでドキュメンタリーを製作、その後劇映画や脚本に進出し欧米で高い評価を受ける。代表作は初めて母国でメガホンを取った本作のほか『イリュージョン』2011、『COLD WAR あの歌、２つの心』2018 カンヌ映画祭監督賞 など

アカデミー賞授賞式で
photo: Lucy Nicholson
REUTERS / Forum

お話：坂尻昌平（さかじり・まさひら）映画研究者。早稲田大学大学院に学ぶ。共編著『ジャック・タチ』エスクァイアマガジンジャパン 1999、『ジャック・タチの映画的宇宙: Jacques Tati』同 2003、『世界映画大事典』日本図書センター 2008、『淡島千景～女優というプリズム』青弓社 2009、『渋谷実～巨匠にして異端』水声社 2020

1962年のポーランド。孤児として修道院で育てられた18歳のアンナは、院長から修道女の誓いを立てる前に唯一の肉親である叔母ヴァンダに会うように言われる。ヴァンダを訪ねたアンナは、自分の本名がイーダでユダヤ人であること、亡き両親はどこに埋められているのか分らないことを知らされる。

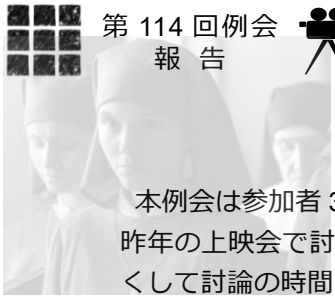
イーダは出自の秘密を知るためヴァンダと旅に出て、戦時中に両親を匿っていたシモンを訪ねる。ヴァンダは幼い息子を姉でイーダの母であるルージャに預けたが、一家とともに殺されていた。イーダのもとをシモンの息子フェリクスが訪れる。彼は老い先短い父を安らかに眠らせてくれるならルージャらを埋めた場所を教えると約束し、埋葬場所を掘り起こす。そして生まれたばかりでユダヤ人とは気づかれないイーダを神父に託したと告白する。イーダとヴァンダは遺骨を故郷の墓に再埋葬する。

イーダは修道女として生きていかねばならないはずだが、ヴァンダは…。イーダは旅の途中で知り合ったサックス奏者の青年リスと再会し2人は結ばれる。リスはイーダに結婚を申し込むが…

第二次大戦中には少数ながらイェドヴァブネ事件（1941）などポーランド人によるユダヤ人虐殺事件があり、スターリン時代末期には自国民を厳しく罰したポーランド女性検察官などがいた。本作はそうした負の歴史に目をつぶらず公平に描いた点に特徴がある。また、モノクロ/スタンダードの洗練された構図と素晴らしい撮影、詩的な映像の水準の高さは息をのむほどだ。台詞や俳優の演技・カメラの動きはミニマルで無駄がない。カトリック、ユダヤ人、ホロコースト、スターリン主義、ジャズというポーランドの特性が見事にマッチした作品といえる。

イーダ役のチュシェブホフスカは演技初経験とは思えぬ見事な演技を見せた。これは修道院以外知らない少女が旅を通して成長してゆく教養小説でもある。

（池田光良、運営委員）



第 114 回例会
報 告

ポーランド名作映画ビデオ鑑賞

『イーダ Ida』2025/3/19

本例会は参加者 34 名（うち一般 25 名）と盛況だった。
昨年の上映会で討論の時間が足りないとの指摘があり、今回は解説の時間を短くして討論の時間を十分に取り、活発な議論が行われた。アンケートでは「大変良かった」（５点）７名、「良かった」（４点）４名、平均 4.64 点とかなりの高評価だった。反省点は、上映開始直後の音量調節が不十分だったこと、字幕が見えづらいと指摘があったこと――会場の構造上、投影の位置は変えられないが、椅子の配置を変えられるか、検討したい。

解説の映画研究者、坂尻昌平氏は、叔母ヴァンダにマグダラのマリアを重ね合わせたストーリーや映像表現、さらに音楽設計も素晴らしく、スターリン政権後のポーランドではジャズが流行し、特にコルトレーンの名曲「ナイマ」は愛の告白に聞こえ、バッハのコラールはイーダの揺れる心を象徴していることなどを述べた。

本作は、第二次大戦中のポーランド人によるユダヤ人虐殺事件や、スターリン時代末期に自国民を厳しく罰したポーランド女性検察官など負の歴史も公平に描いた点が優れている。日本映画では被害者を描く優れた作品が多いが、加害者の視点が不十分だという批判が多いのに対し、欧州では近年、**複眼的視点**に基づく作品が増えていることは好ましいと指摘した。

当時の政権下でジャズは弾圧されなかったのかとの質問には、そのようなことはなく、ポーランドでは１９５０年代後半～６０年代にジャズを巧みに使った名作映画が多数制作されたと説明された。（池田光良）

〈感想〉アンケートから

- ✓ モノクロ映像と音楽とに引き込まれました。イーダや他の人物の心のゆらぎを感じながら、鑑賞会は至極の時間となりました。（50歳代）
- ✓ 第2次大戦時のユダヤ人虐殺が物語のベースにある中でのイーダとおばヴァンダの自らを探す旅は、ポーランド映画独特の閉塞感が終始感じられるものであり、モノクロ映画であるにもかかわらず色を感じさせる作品で、最初から最後まで見入ってしまいました。日本やその他の国々で戦争後の負の題材とするものがあるが、ポーランド映画の雰囲気に堪能させられました。もう一回じっくりと観てみたい作品となりました。（60歳代）
- ✓ おばのヴァンダが心に傷を持った女性を見事に演じていて心に残りました。イーダが修道院で育ち、おばに会って、何故自分が修道院に預けられたのかを知っていく物語でした。映像が素晴らしく、イーダが少女から大人の女性になっていく過程が見事でした。『イーダ』を観た後にポーランドのアウシュヴィッツに行く機会がありましたが、景色が北海道によく似ていて驚いた日を想い出しました。おばヴァンダという抵抗運動の闘士を処刑したこともある複雑な女性を通じてポーランドの複雑な背景を知ることができました。（70歳代）
- ✓ ポーランドの情景、文化、人々の表情などから、異国を感じ興味深かったです。あらすじをチラシで拝読し、ストーリーは理解しましたが、歴史背景の知識があれば、まだまだ深読みできたと思います。ポーランドの歴史に触れて参ります。映画解説で味わいをより得られました。本日の上映、ありがとうございました。（60歳代）
- ✓ 私事だが、日本での公開当時劇場で観ようと思ったがいつの間にか上映が終了しており、後に DVD 化されて買おうと思った（レンタルショップで取り扱ってなかった）が、廃盤になりプレミアムが付いてしまったので、今回これを好機と思い観に来た。些細な生活者でも耳をつんざくような「聖」の修道院での生活と、常にどこからか音が飛んでくる「俗」の一般庶民の生活がとても対比的。修道女の主人公が唯一の肉親でほとんど馴染みのない人のもとに訪れ生活するという展開は、ルイス・ブニュエルの『ビリディアナ』を想起させた。（30歳代）
- ✓ 日本の民話や昔話と共通する感性だなぁと感じました。例えば「雪女」。これぞ映画という映画でした。バッハが好きなので、バッハが使われているのもよかった。（50歳代）
- ✓ ストーリーは追えたが、細かな描写は分からないところもあった。心の中の葛藤はある程度分かるのだが、同時代の同国人でないと理解できないところがあるのでは？特にキリスト教、ユダヤ教は知識としては少しはあるのだが、一般の日本人には分からないところがあるのではないかと思った。（60歳代）
- ✓ イーダ役（アガタ・チュシェブホフスカ）はとても良い。

新人とは思えない。解説で内容がよく分かった。その上でもう一度見たい。（60歳代）

✓（質問）私はパヴェウ・パヴリコフスキ監督作品は『COLD WAR』しか観たことがない上に、1960年代のポーランドの状況など全く知識がないのだが、彼の作品では劇中の音楽が舞台の時代を描くことが多いが、当時のポーランドでジャズは一般的に流行していたのか。ジャズ=西側音楽は弾圧対象ではなかったのか。

✓字幕が見えづらく残念。

《新会員のひと言》

ポ文協に入会して　　樋口　みな子

私は平和・環境・人権をテーマに、個人で『銀河通信』を発行して今年の7月で37年になります。こんなに長く続けられるとは夢にも思いませんでした。「もういいか」と25周年の記念会を開いていただいたときに発行をやめることも考えましたが、朝日新聞記者だった植村隆さんが現役時代に書いた慰安婦問題で「嘘だ、デマだ」とバッシングを受け、当時、植村さんは北星大学で講師として勤務していましたので、多くの市民が立ち上がり「植村裁判を支える会」を立ち上げ、私も事務局の一翼を担いました。私の『通信』でも何度も取り上げました。

ポーランドへの関心はずいぶん前からになります。中学生の時に『アンネの日記』を読んで衝撃を受けました。ユダヤ人であったためアムステルダムの隠れ家で暮らし、密告で強制収容所に送られました。家族や同居人を鋭い観察眼で表現しました。

なぜアンネが迫害に遭わなければならなかったのか知りたくて、ポーランドにあるアウシュヴィッツ博物館を訪ねたのは2014年でした。当時「ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会」でささやかな活動をしていて、その仲間と出かけました。アウシュヴィッツ第二収容所のビルケナウにも行き、生き延びた女性の証言で「着たきりでシラミ、ノミ、ダニ、南京虫が襲い掛かる劣悪な環境で体中が赤くはれていた」と書いています。まったく人間扱いされていなかったことに涙がでました。アンネは病気でドイツのベルゲン・ベルゼン強制収容所で同じような環境で亡くなったのでしょう。

『アンネの日記』を読んで『銀河通信』もアンネのような社会に開かれた鋭い批判精神に近づきたいと思いました。ポーランドでは映画『シンドラーのリスト』で有名なシンドラーの工場も訪ねました。跡地は歴史博物館になっていて、助けられた工員の写真が壁面にずらりと並んでいて、シンドラーの良心に触れて感動しました。

ポーランドは、第二次世界大戦の時、ソ連とドイツに挟まれて大変な苦難を強いられました。地下組織での抵抗活動はワイダ監督の『地下水道』で描かれていますが、ソ連占領下の住民も収容所に送られたり虐殺されたりしたことや、20,000人を超えるポーランド軍将校がカティンの森で殺されたことは国民には隠されていたことを映画で初めて知りました。人間としての強さと弱さを何度試されてきたのだろうと思います。日本人はもっと真剣に「戦争する国にしていいのか」と一人ひとりに問われていると思います。

映画上映会や音楽会などみなさまとの交流を楽しみにしています。（ひぐち・みなこ、2025年1月入会）

さっぽろ雪まつり 第49回国際雪像コンクール（大通 11 丁目 国際広場 2025.2.2-7）に

ポーランドチーム（10 回目、昨年と同じヴロツワフ美術大学 ASP Wrocław チーム）が出場しました

=中写真中央= 雪像「Homo Creator 創造する人間」人間のもつ創造的エネルギーと無限の思考力を象徴する作品です
=右写真左より= プシェムィスワフ・ピンタル Pszemysław Pintal（チームリーダー），マチェイ・アルブジコフスキ Maciej Albrzykowski，アレクサンドラ・ヤニク Aleksandra Janik さん（撮影 安藤厚; 尾形芳秀）